

書評

一柳廣孝著『こっくりさん』と『千里眼』——日本近代と心靈學』

櫻井進

ニュートン革命によって成立した近代科学が数字によって認識可能な領域のみを科学の内部に取り込み、数学的・定量的な認識枠が捉えきれない領域を科学の世界の外部に位置づけたことは、トーマス・クインの『科学革命の構造』以来、常識的なものになっている。

本書の試みは、一九六八年以降に広がった構造主義以降の近代そのものに対する批判的な立場——それは、フーコー・デリダ・アルチュセールやフランクフルト・シューレによって行われた近代批判を前提としながら、近代科学がいかんして科学的領域と非科学的領域とを分割していったのかという問題領域を明らかにすることにあり、それは、一八世紀が啓蒙理性を特権化した科学的理性の時代であったのに対し、一九世紀は一転して、不合理な世界や無意識の暗黒の領域を見いだしたロマン主義の時代となる。そこでは、非合理的なものや無意識の暗黒の領域に目が向けられ、そこに崇高なもの the

sublime に美を見いだすという、理性から非理性への逆行現象が発生した。ゴシック小説の嚆矢であるメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』すなわち現代の『ロメテウス』は、近代科学のテクノロジを駆使し、電気によって生命を与えられたモンスターが、醜悪で凶暴な復讐のルサンチマンを体現した不合理な存在となったことに、近代理性と非理性的なものとの共犯関係を露呈した。

著者は、こっくりさんと千里眼という不合理な現象がどのように生み出されたのかを東西の資料を博捜しながら明らかにして行く。その結果、こっくりさんは、日本固有の現象ではなく、西欧で行われていたテーブル・ターニングの影響によって成立し、流行したものであることが明らかにされる。また、テーブル・ターニングの背景には、メスメリズムという動物磁気説があり、不合理な現象を科学的に説明するという心靈学の延長線上

に存在している。不合理な領域とは、科学以前には存在せず、科学そのものが不合理な領域を生み出し、どこまでが科学によって解析可能かを明らかにすることによって、非合理的な者は科学の内部へと繰り込まれていったのである。

こういった近代科学の合理／非合理の境界設定に関する興味ぶかい事例が本書では見当されている。それは、千里眼をめぐるジャーナリズムやアカデミズムの世界の葛藤である。長尾いく子の透視術がジャーナリズムをにぎわすと同時に、実際にそういった現象が発生するの、科学的な世界現象によって解釈可能なのかに関する侃々諤々たる議論がなされた。東京大学の心理学科の福来友吉は、千里眼を科学的解釈によって実証しようとするが、結果的に、官立大学の中の制度としての実験心理学が迷信的な領域に関わることは、科学の正統性をそこなうものとされ、福来は、東京帝大を休職することを余儀なくされた。

著者は様々な事例をあげながら科学的言説と非科学的言説の境界設定をめぐる葛藤を鮮やかに描き出していく。この部分は読者にとっても、大いに興味をそそられることであろう。

著者は、心霊学が宗教と科学の領域を媒介する可能性

をたどり、最終的には制度としての科学の内部に回収されてしまったという。いうまでもなく、ニュートン・パラダイムによって生み出された近代科学のみが唯一絶対なパラダイムではない。近代科学の鬼子であった心霊術が別の科学のパラダイムを変更する対抗的な領域を形成する可能性を見いだしている。

日本の「近代」が歩んできた「霊」をめぐる屈折した軌跡は、「科学」との微妙な関係を内部に孕みながら進んできた。このような屈折に対して、「日本」を土台に果敢なアプローチを試みてきたのは、柳田民俗学である。

ただしそれは、むしろ「科学」に準拠した「文学」的な方法論を整備していくことで、「科学」の内部から「化物」に目を向ける者だった。その意味で民俗学の対立項たりえない。

いっぽう、心霊学は「科学」の内部から生まれ、「科学」によって否定された認識体系である。それは「科学」を自明としてきた「近代」にあって、その内部から生じた鬼子であった。しかし、だからこそ心霊学は、現代の閉塞的な状況を相対化するための認識装置たりうる。明治以降の心霊学をめぐる受容の歴史は、あらためて「現代」を見なおす契機となるだろう。

著者のこういったスタンスには共感できる部分もある

が、問題は近代という我々自身を拘束している歴史的條件を、まさにその内部から解体構築することにある。本書は、読み物として見るならば、きわめて良質な部分を含んでいる。しかし、まず問わなければならないのは、近代という運動が常にその内部に異物や夾雑物を含んだ体系であるという点である。近代批判は、近代そのものの系譜的な検討から始まるのであって、近代に対抗的な領域に過度な期待を持つことは、認識論的な危うさを持つている。また、著者に限ったことではないが、現在では、自己崩壊を始めつつある近代に対して批判的スタンスをとることが常識化されてしまっている。著者の論述に欠如しているのは、本質的に近代を体現しつつ、そこから身をそらさざるを得なかった構造主義以降のフランス哲学者たちの徹底的な自己解体をも辞さない批判的態度である。もちろん、こういったことを著者に要求するのは酷かもしれないが、近代と対峙するには不可欠なものであろう。

また、本書に対する不満の一つは、著者が心霊術の問題領域を夏目漱石や芥川龍之介から見いだしながら、全体的な叙述の方向が社会史的方向に向かったのかという点である。私の疑問は、本書が達成した認識のよってはいして、夏目や芥川のテクストの読解に新たな視点を提

示しうるのか、あるいはテクストの解体構築的な読解がもたされるのかという点である。

最後に、本書の出版以降の問題ではあるが、アドルノの「アウシュビッツ以後、詩を書くことは野蛮である」というアフォーリズムに習うならば、はたしてオウム以降宗教を、野蛮に陥らずに、いかに語りうるのかという問題が、著者のみならず、我々にも重くのしかかっていることをつけ加えておかなければならない。

(一九九四年八月一〇日・講談社選書メチエ・講談社刊  
・一、五〇〇円)

(名古屋大学)